

*Edition Another View*



原語と品

Raffiné

怒りが立ち上がる瞬間、  
人は言葉の手前に戻る。

原語が立ち上がり、  
そして、  
どの言葉で立つかが問われる。

品は、  
言葉が丁寧であることでも、  
感情を持たないことでもない。

原語を持たないことが、  
品なのではない。

原語を出さないように生きることは、  
時に、存在を薄くする。

怒りを感じないふりをし、  
荒い言葉が浮かばないように注意し、  
内側の動きをなかったことにする。

それは整っているようであり、  
実は、どこか不安定だ。

品があるという評価の下で、  
人は自分の内側を  
少しずつ削ってしまうことがある。

原語は、  
誰かを傷つけるためにあるのではない。

それは、  
感情が最初に触れる場所にある言葉だ。

考える前、  
選ぶ前、  
編集が入る前。

人が人として反応するとき、  
そこに必ず立ち上がる音。

原語があるということは、  
感受性がまだ生きているということでもある。

それを完全に失った状態は、  
静かだが、どこか空洞だ。

では、品とは何か。

それは  
原語をなかったことにする力ではなく、  
原語に支配されない態度だ。

原語が立ち上がる。  
それを自覚する。

そして、  
どの言葉を外に出すかを選ぶ。

この一連の選択が、  
存在の格をつくる。

品とは、  
結果ではなく、  
繰り返される判断の積み重ねだ。

原語があるから、  
品が崩れるのではない。

原語があるからこそ、  
品は選び直される。

怒りを知っている人は、  
怒りを振りかざさない強さを持つ。

荒い言葉を知っている人は、  
静かな言葉を選ぶ理由を知っている。

原語と品は、  
対立するものではない。

それは、  
人間性の中で同時に成立する  
二つの層だ。

A series of blue diamonds, each set in a gold ring, arranged in a diagonal line from the bottom left towards the top right. The diamonds are faceted and catch the light, creating bright highlights and deep shadows. The background is a solid, dark black, which makes the blue color of the diamonds stand out prominently.

原語がある。  
それでも、  
どの言葉で立つのかを選べる。

その選択の中に、  
人の品は静かに宿る。

R.

Edition — 存在の本質  
別景：原語と品

著者：美学思想家 古川玲奈  
発行：Raffiné  
2026